

ナホトカ市概要



ナホトカ湾

平成28年2月
在ウラジオストク日本国総領事館

ナホトカ市概要

1 位置	2
2 沿革	2
3 気候	2
4 人口・住民	2
5 外交団	2
6 行政・議会	<u>2</u>
7 経済・産業	3
8 治安	3
9 日本との関係	4

ナホトカ市概要

1 位置

(1) ナホトカ市は、ロシア連邦沿海地方の南部に位置し、極東最大の港をもつナホトカ湾に面し、沿海地方で第2に重要な都市である。

(2) 東京からの直線距離は約1,000km、函館とは約420km、ウラジオストクからは180kmである。

2 沿革

(1) ナホトカ市が所在する沿海地方の領域には、古くからツングース系民族が居住しており、渤海(698～926年)、金(女真族, 1115～1234年)等の国家が興亡を繰り返した。また、中世から近世にかけては元、明、清国等の勢力が及んだ時期もあった。

(2) 1850年代前半、東シベリア総督ムラヴィヨフ・アムールスキーの支援を受けたロシア海軍士官ネヴェリスコイが極東地域を探検し、アムール川流域に砦を建設するなど、ロシアの極東進出の足がかりを築いた。その後、ロシアは1858年のアイグン条約締結によりアムール川左岸とその航行権を、また、1860年の露清間の北京条約によりウスリー川東岸を獲得し、これにより現在の沿海地方はロシア領となった。

(3) 1859年、ロシア艦「アメリカ」号が沿海地方の海岸で天然の良港を発見し、この湾を「ナホトカ(ロシア語で「掘り出し物」の意)」と名付けた。ナホトカ湾沿岸への入植は19世紀末に本格化し、1907年、同地にアメリカンカ村が建設された(1940年にナホトカ町となる)。

(4) ナホトカ町は1950年に市に昇格し、港湾都市として発展した。また、ソ連時代には、閉鎖都市となったウラジオストクに代わり、沿海地方の対外的な玄関口としての役割も果たした。シベリア抑留者の日本への帰国港になっていた。現在のナホトカ市は大規模な商業港、漁業コンビナートや石炭・石油コンテナターミナル等を有する極東の物流・漁業の中心地となっている。

3 気候

ナホトカ市は、北緯43度東経133度に位置し、札幌市とほぼ同緯度にある。冬の気候はシベリア奥地ほど厳しくはないものの、1月の平均気温は氷点下9.3度(2015年)、雪は少なく乾いた北風が大陸から海に向かって強く吹き抜ける。モンスーン型気候であり、年間降水量は約860mmで、7月から9月に降雨が多い。8月の平均気温は25.1度(2014年)。

4 人口・住民

2015年初のナホトカ市の人口は15万6,649人。住民の大多数はロシア人である。

5 外交団

ナホトカ市には北朝鮮「総領事館」が置かれているが、ウラジオストク市への移転が進められている。2003年9月には、北朝鮮の羅先市と友好都市提携に関する協定に署名するなど、北朝鮮との関係は沿海地方の他都市と比べ深い。

6 行政・議会

2014年春、地方自治体制度が改正され、市長（市議会議長を兼任。立法、法擁護、予算承認等を担当）と市行政府長（所謂シティ・マネージャー。住宅公共サービス、運輸、予算執行及び市所有財産の管理等を担当）による二頭体制が敷かれることとなった。同年6月、ナホトカ市議会は全会一致でピリペンコ市議会議長を市長に選出したが、同年11月、ピリペンコ市長が辞任し、現在は市長職は空席である（グラートキフ第一市長代行）。また、7月には市議会が同じく全会一致でコリヤーディン前市長を初代の市行政府長に選出した。

7 経済・産業

(1) ナホトカ市はロシア極東の交通の要所であり、ロシア全体で見ても海上交通の分野では、サンクトペテルブルク、ノヴォロシースクに次ぐ大規模港湾都市である。2014年のナホトカ諸港の全体の貨物取扱量は8000万トンに達している。港はナホトカ港とヴォストーチヌイ港に大別され、主な取扱貨物は石炭、石油、木材、コンテナである。また、陸路では、ハルビン―スィフンヘーウラジオストック港―ナホトカ港―ヴォストーチヌイ港―アジア太平洋の各種港を結ぶ国際輸送回廊プロジェクト「プリモーリエ1」の建設の構想がある。

(2) ナホトカ港は、ヴォストーチヌイ港ができるまで極東最大の港であった。ナホトカ商業港（主な取扱貨物は鉄鋼、非鉄金属）、ナホトカ海洋漁業港（水産物、木材、金属製品）等がある。

ヴォストーチヌイ港は極東で最大、ロシア国内でも最大規模の石炭積出港で、2015年の年間石炭輸出量は1800万トンとなっており、その内約40%が日本向けであった。また、2009年には東シベリア太平洋原油パイプライン（ESPO）の終着点となるコジミノ港が加わり、同港の2015年の原油取扱量は3000万トンに達し、パイプライン稼働開始からの原油輸出量は2015年3月に1億トンに達した。同港の電力供給は沿海地方南部への電力供給と同じラインで行われていたが、2015年1月に統一エネルギーシステム社によって、同港に直接電力を供給するための送電設備が整備された。また、2020年を目標にESPOを拡大する計画もあり、同計画により原油取扱量が3000万トンから5000万トンへ増量する予定である。

日本企業との関係では、現在実施中のヴォストーチヌイ港における第3次拡張計画において、2014年に同港と丸紅及び三井三池製作所との間で1億ドル規模の石炭積出施設設置に関する契約を締結した。さらに、2015年9月の第一回東方経済フォーラムにおいて「ヴォストーチヌイ港」社と丸紅他2社がヴォストーチヌイ港第三ラインの建設及び運営に関する文書に署名した。現在スンマ・グループがヴォストーチヌイ港の東隣に同様の石炭ターミナルを建設中である。

また、コジミノ港において石油化学プラント建設計画があり、同計画には三井物産がロシア側とMOUを結んでいる。

8 治安

(1) 犯罪の傾向

ナホトカ市における2014年の犯罪認知件数は2,653件で2007年の5,596件から年々統計上は減少してきており、犯罪発生率（人口10万人あたり）は1,696件でありロシア平均の1,604件で同水準である。犯罪の特徴として、窃盗が最も多く（犯罪認知件数の54%）、スリやひったくり・置き引き等が発生の大半を占めている。同地における犯罪の特徴として、麻薬の生産国として懸念されている中国及び北朝鮮と近隣であるという地理的状況、郊外に大量に自生する大麻草の存在などから、従来より麻薬関連犯罪が蔓延する土壌を有しており、

これら麻薬の密輸に係る犯罪，麻薬中毒者による各種犯罪の多さが挙げられる。一方，2004年以降，連邦保安局，税関，内務局など各取締機関により積極的な取り締まり活動が行われ，検挙件数は毎年増加しているとされる。

(2) 安全対策上の留意事項

(ア) 従来よりロシア連邦の欧州地域では極右派の民族過激若者集団が外国人排斥運動を展開してきているが，シベリア・極東地域でもそのような動きが見られるようになっており，警戒が必要である。

(イ) 気をつけなければならない犯罪としては，強盗，ひったくり，恐喝，スリ，置き引き等で，夜間の一人歩きや人通りの少ない場所への等への出入りは厳に控えるべきである。

9 日本との関係

(1) 歴史

ソ連時代には，ナホトカが極東における日ソ交流の窓口としての役割を果たしていた。1961年，横浜～ナホトカ間に定期客船航路が開設され，1967年には在ナホトカ日本国総領事館が設置された。

ソ連邦崩壊後の1992年，ウラジオストクが外国人に再び開放されたことを受け，1993年11月に在ナホトカ日本国総領事館が閉鎖され，在ウラジオストク日本国総領事館が開館した。定期客船航路の発着港もウラジオストクとなったが，ナホトカ市には現在も貨物船が就航するとともに経済・文化等の分野で日露交流が継続している。

(2) 日本人墓地

(ア) 第二次世界大戦終結直前の8月9日に対日参戦したソ連は，8月15日の終戦後も8月下旬から9月初めまで戦闘行為を継続し，翌46年の夏頃までの間に，満州，北朝鮮，南樺太及び千島に駐留していた旧日本軍人等を，旧ソ連，モンゴルに約1200カ所点在していた収容所に抑留し，約10年に亘り土木建築や鉄道建設，炭坑作業等の重労働を強要した。抑留中には労役，病気，寒さ等の厳しい状況の中，多くの方々が犠牲になった。生き残った日本人の多くがナホトカ港より日本へ帰還した。

(イ) ナホトカ市の日本人墓地では，2004年6月から同年9月まで4回に亘り厚生労働省による遺骨収集作業が行われ，524柱が収集された。2012年8月にナホトカ市行政府により，1972年に日本政府が建立した石碑を含む周辺一帯が日本人墓地の記念公園として整備された(同市セニャビナ通り)。

(3) 自治体交流

ナホトカ市は，舞鶴市，敦賀市，小樽市と姉妹都市関係にある。

(4) 文化・教育

ナホトカ市民の日本への関心は高く，在ウラジオストク日本国総領事館が同市で開催する日本文化事業には毎回多くの市民が訪れる。2012年2月には日本映画祭を開催し，2013年2月に日本文化体験教室(浴衣の着付け及び茶道デモンストレーション等)を実施し，2014年1月には日本映画祭を開催し，同年11月には日本文化デイズとして，映画上映，浴衣の着付け教室及び折り紙教室，浴衣ショーを実施した。2016年2月には「日本酒及び日本食文化紹介INナホトカ」を実施した。

(了)